

当院では、診療の際はワンちゃんネコちゃんをお預かりしています。この点について、動物と離れることへの不安やなぜそうするのか疑問を持たれる方がいらっしゃいます。

飼い主さんと一緒にいる動物たちは、本来の姿～強さや適応力～を発揮する事ができなくなってしまう。いわゆる「甘え」が強くなり、「我慢」が出来なくなってしまうのです。

そばについているだけではなく、飼い主さんの姿が見えてしまうだけでも、声が聞こえてしまうだけでも、その影響が出てしまいます。これは、厳しい言い方をすれば「しつけ」の問題で、本来なら飼い主さんがそばにいても、落ち着いて診察を受けられるようになっている事が理想です。

例えば、診療台の上で落ち着かない子を、ただその向きを変えたり、飼い主さんに隠れて頂く、いわゆる飼い主さんが見えただけで、それだけで落ち着いたりします。

確かに、診察で何が行われるか、どう行われるか、これは心配でしょう。そういう時は、まず信頼して頂けると助かりますが、オープンスペースの当院では、ちょっと覗いて見て頂くことは可能です。いつでもおっしゃってください。

また、極端に臆病で、飼い主さんにそばにいて頂いた方が良い子の場合は、こちらからお願ひ致します。また、動物に無理な不安を与えないように、診察台に乗せるまで、かごから出すまでは飼い主さんに行って頂く方が良いでしょう。

でも、一番問題なのは、飼い主さん自身の心の問題です。動物の気持ちではなく、飼い主さん自身の考えの誤りや心の弱さで離れられない、実はこれが多い理由なのです。僕らが診療していても、動物は平気にしているのに、飼い主さんが過度に心配してしまい、それに反応して動物も緊張してしまう、こんな本末転倒な事が実は多かったです。そして、このような事を心配するのは、それはむしろ「過干渉」であり、動物にとって「ストレス」になってしまうことを忘れてはいけません。

また、動物がしっかり闘病をしても、その気持ちを甘やかす事や心配のしすぎで萎えさせてしまったり、足を引っ張ってしまう事も多々あります。一所懸命頑張っている子たちには、「痛いね」「つらいね」「苦しいね」というマイナスの気持ちと声ではなく、「よく頑張ったね」「楽になるよ」「いい子だね」というプラスの気持ちと声をかけてあげてください。実は、これだけでも動物の緊張はほぐれるものなのです。また、飼い主さんの緊張や不安も大きく影響するのを忘れてはいけません。

※よく、「過保護」という言葉を耳にしますが、甘やかされていたり、親御さんにぴったり寄り添っていないといけないような子供さんを‘悪く‘言うときに使われますね。これは、犬や猫でも同じように使われています。

過保護の何処がいけないのでしょうか。動物も小さなお子さんも、周りの方がしっかり面倒をみて、いろいろなことを教えて、初めて自立するんですよね。逆に保護してあげなければ、普通に生活をするのもままならない、多分生命に関わる事態になってしまうでしょ

う。

過保護は悪いわけではなく、弱い彼らには最低限必要なことなのです。つまり、「過保護」の意味を間違っ使われているわけです。じゃあ、何がいけないのでしょうか。いけないのは、ずばり「過干渉」です。意味は行き過ぎた過保護、ないしは強い依存関係、ということではないでしょうか。これは、以前児童心理学の先生とお話したときにも、「子育てと動物と生活を共にする事は同じだね」という結論になりました。

親や飼い主さんが、何かが出来る子に対して、できないだろうと決め付けて余計な世話を焼いたり、過度な愛情をかける、自分の心が離れられないために常に寄り添いすぎる、必要なことを教えずに代わりにやってしまう、などなど。心当たりはありませんか？親離れを要求する前に、子離れをきちんとしましょうね。

話を戻します。でも離れて頂く理由は、他にもいろいろあります。診療には、適切な保定（動物を支え、落ち着かせ、動かさないようにすること）が不可欠です。この保定は、やはり看護師や獣医師が行う方が確実に、安全に処置が出来、そのため診療の負担や時間を減らす事ができます。また、飼い主さんが怪我をすることや疲れきってしまうことを防ぐ事もできます（看護師さんの腕や手は、傷だらけです。そして、保定はこつと体力勝負なのです）。

あわせて、おうちでの治療で、場合によっては動物に嫌われてしまう飼い主さんに、病院でまで嫌われて欲しくない（保定も嫌がる子がいますから）という気持ちもあります。もちろん、治療や処置で飼い主さんが嫌われてしまうことはありませんが、例えばご家族の中で、処置などをする方と甘やかすだけの方がいらっしゃれば、やはり処置をする方は疎まれてしまいがちです。動物に平等にすることだけでなく、ご家族も平等にしなければいけないわけです。